法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

理解・不理解の主題から読み解くヤンソン作品の変化 ： 『ムーミン谷の仲間たち』 を中心に

Kobayashi, Ayumi / 小林, 亜佑美

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
371
(終了ページ / End Page)
390
(発行年 / Year)
2016-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013331

〔論文〕

理解・不理解の主題から読み解く ヤンソン作品の変化
―『ムーミン谷の仲間たち』を中心に

The change of the theme of understanding and not understanding in Tove Jansson's works: mainly *The Tales from Moomin Valley*

法政大学大学院　国際文化研究科　修士課程
小林亜佑美
KOBAYASHI Ayumi

序章　理解・不理解の主題以前のヤンソン作品における「安全と災難の構造」：ムーミンシリーズ第１～５作目の変遷

トーベ･ヤンソンは画家や挿絵画家として早くから活動していたが、1945 年に『小さなトロールと大きな洪水』を出版し、本格的な作家活動を開始した。これは児童文学のムーミンシリーズとして 1970 年までに全 9 巻が刊行され、次第に国際的な人気を得ることとなったものである。彼女は、ムーミンシリーズの後は大人向けの長編・短編を執筆し、ムーミンシリーズから大人向け作品への制作移行期には、青少年向けの自伝的作品と、母をモデルにした作品も書いている。なお、彼女の母語はスウェーデン語であり、作品はスウェーデン語で書かれている。

25 年をかけて完結したムーミンシリーズは、作品ごとに趣が異なる。こうした差異は、作品の構造および主題の変化である。ヤンソンが 1966 年に『ムーミン谷の冬』（1957 年）で受賞した国際アンデルセン賞に際する受賞スピーチの内容と作品とを照応することによっ

て、『ムーミン谷の冬』までの変化がわかる。このスピーチでヤンソンは、表現における「子どもの世界」の一側面としての「安全と災難」について、またそうした世界を大人が書く理由について述べた。その一部を以下に引用する。

> きょうお話ししたいのはこの［子どもの］世界についてです。なかでも、子どもの世界に多い側面のうちのふたつ、つまり安全と恐怖についてお話ししましょう。
>
> ときおりふしぎに思うのです。子どもの世界をあとにしてひさしい人々が、突如として、子どものための物語を書きはじめるのは、いったいどういうわけなのでしょう。そういうときは、本当に子どものために書いているのでしょうか。むしろ、悲劇にせよ童話（ナーサリーライム）にせよ、自分の愉しみ、あるいは悩みのために書いているのではないでしょうか。（中略）愉しみがつねに童話の原動力であるとはかぎりません。大人の共同体には存在しにくい、本質にかかわらない底荷（パラスト）、つまり子どもっぽさを脱却しようとしているのかもしれません。それとも、薄れていく何かを描こうとしているのかもしれません。自分自身を救うために書くこともあります。責任がなく、柔軟な、あの「なんでもあり」の世界にもどるために。
>
> 子どもの世界は、原色で描かれた風景画です。そこでは、安全と災難（カタストロフ）が互いに養分をあたえあいながら併存しています。そこではあらゆるものに場所があり、一切が可能です。非合理なものが極めて明晰かつ論理的なものと混ざりあっています。夢の特性である超現実空想的な設定に織りこまれた日常の現実があります。（中略）
>
> 日常性のうちにひそむ興奮と、空想のうちにひそむ安全とのあいだで完璧な均衡をたもてるのは子どもだけだと思います。みご

とな自己防衛の手段です。脅威と凡庸という諸刃の刃をかわす手段なのです。

おそらく子どもの本の作家は、この危なっかしい均衡をとりもどそうとしているのです。日常のつまらなさに息苦しくなり、あの失われた非合理をもとめているのかもしれません。あるいは、恐怖におそわれて、安全な場所への帰り道をさがしているのかもしれません。（中略）

作家が読者に果たすべき義務がひとつあります。それは、しあわせな結末です。あるいはまた、子どもがさらに物語をつむぐことができるように開かれた道です。（中略）

災難は待ちに待った冒険の成就にほかならず、書物よりも、さらにはファンタジーよりも真実なのです。そして災難と肩を並べて存在するのが安心です。つまり小さな空間にもぐりこんだ子どもが手に入れる完璧な安全なのです[1]。

ヤンソンにとっての「子どもの世界」とは、「安全と災難」が併存し「しあわせな結末」で締めくくられるというものである。

ムーミンシリーズ第1作目『小さなトロールと大きな洪水』（1945年）と第2作目『ムーミン谷の彗星』（1946年）は、自然災害に見舞われたり生き物に遭遇したりし、それらを解消するといったエピソードが何度か繰り返され、ハッピーエンドで終わる。そのため、これらの作品は、ヤンソンが理想とする「子どもの世界」が表現されていると言える。本論文では、このような災難と安全が繰り返され、しあわせな結末で終える物語の形式を「安全と災難の構造」と呼ぶこととする。

初期のムーミンシリーズにあった安全と災難の構造は、シリーズが進むにつれて徐々に失われていった。第3作目『たのしいムーミン一家』（1948年）、第4作目『ムーミンパパの思い出』（1950年）、第5作目『ムーミン谷の夏まつり』（1954年）は、安全と災難の構造によ

り成り立っているが、災難の役割は弱体化している。これらの作品における災難は、登場人物たちが解消あるいは解決すべき事象でありながらも、彼らを脅かすものではなく、初期の作品とはやや性質の異なるものとなっている。『たのしいムーミン一家』で複数の騒動を生じさせる「まほうのぼうし」は、登場人物たちを困らせることもあるが、楽しませる役割も担っている。『ムーミンパパの思い出』では、嵐や生き物との遭遇といった災難が脅威でないことに加えて、それらは過去の出来事内のものであり、物語内の現在における登場人物たちが恐れる対象ではない。『ムーミン谷の夏まつり』では、洪水が生じるが、登場人物たちはすぐに生活様式を変更し、洪水そのものへ恐怖を抱かない。

安全と災難の構造では、出来事とそれに対する登場人物たちの行動が物語を進めており、筋書を追うことによって作品が成立している。ムーミンシリーズ第 1 ～ 5 作目には、こうした類似の特徴がある。しかし、第 6 作目『ムーミン谷の冬』（1957 年）以降の作品は、筋書きよりも登場人物たちの心理描写に重点が置かれるようになり、それ以前の作品とは内容に相違が生じている。これと同時に、外部からの災難は作中に存在しなくなった。『ムーミン谷の冬』では、安全と災難の構造は形式的にのみ存在している。というのも、この作品では、主人公のムーミントロールが災難であると認識していた冬が、解消すべき脅威ではなく、実質的には災難であるとは言えないからである。

「安全と災難の構造」が表現されなくなった第 7 作目『ムーミン谷の仲間たち』およびそれ以降の作品では、何が表現されているのだろうか。これを明らかにするために、本論文では、『ムーミン谷の仲間たち』における主題の考察を目的に論を進めるが、その手順として、『ムーミン谷の冬』が持つ二面性、すなわち形式的にのみ安全と災難の構造を保持していること、その後の作品に関連する主題も扱われていることを示したうえで、『ムーミン谷の仲間たち』の分析を行う。

第一章　安全と災難の構造に代わる理解の主題の出現：『ムーミン谷の冬』

『ムーミン谷の冬』は、冬眠から目覚め、初めて冬の世界を経験することになったムーミントロールが春を迎えるまでの物語である。ムーミントロールと彼の家族や友人たちのほとんどは冬眠するが、ある冬、ムーミントロールは不意に目覚めてしまい、再び冬眠に戻ることができなくなった。ムーミントロールは、彼のすぐ後に彼と同じく冬眠から目覚めた「ちびのミイ」と、この冬にムーミンパパの「水浴び小屋」で暮らしていた「おしゃまさん」とともに過ごすことになった。ムーミン谷では冬に雪が降り景色が変わるだけでなく、夏と冬とではそこに住む生物も異なる。すなわち、夏の生き物が冬眠する冬には、夏に息を潜めていた生き物が出てくるのである。

この作品は、形式的にのみ安全と災難の構造を保持し、登場人物の内面を描いており、ムーミンシリーズ第 1 ～ 5 作目までの特徴とムーミンシリーズ第 7 作目以降のヤンソンの作品の特徴とを含有する作品であると言える。『ムーミン谷の冬』で描かれる内面とは、登場人物の心理的な変化である。ムーミントロールは、夏とは環境も状況も異なる冬の経験を通して複数の変化を遂げた。変化には、冬の経験全体を通してのものと、そのうちの個々の出来事におけるものとがある。

冬の経験全体からの変化としては、第一に、ムーミントロールが冬は外部からの脅威ではなく現実の一部分であると認識を改めたということがある。冬眠から目覚めてすぐに、彼は冬を「だれかほかのやつ」に「占領」された世界であると考えている。そして作品の終盤には、彼の季節の認識の変化について、以下のように書かれている。

> もう春がきたのです。しかし、彼の考えていたのとは、まるっきりちがっていました。
>
> 彼は考えていたのです――春というものは、よそよそしい、い

じのわるい世界から、自分をすくいだしてくれるものだと。ところが、いまそこにきているのは、彼が自分で手にいれて、自分のものにしたあたらしい経験の、ごく自然なつづきだったではありませんか[2]。

また、第二に、ムーミントロールは、母親や友人のスナフキンを頼ることのできない状況下で、自力で苦難を乗り越えることに意義があると考えるようになるという変化も遂げた。彼は、冬眠から目覚めた際には真っ先に母に助けを求め、次に旅に出ている友人のスナフキンのもとへ向かおうとし、他者へ頼ろうとする態度を取っていた。しかし初春には、寒さから植物を守ろうとしたスノークのおじょうさんに対して「自分の力で、のびさせてやるのがいいんだよ。この芽も、すこしはくるしいことにあうほうが、しっかりすると、ぼくは思うな」と発言しており、思考の変化がわかる。

このようなムーミントロールの変化は、季節の連続性を「理解」し、苦難に自力で対処する必要性を「理解」した、と言い換えることができる。作品を構成する個々の出来事は、ムーミントロールが理解すべき対象である。それらは、冬の自然現象や、冬の生き物の性質・習慣といったことである。彼はまた、対象そのものだけではなく、対象にどのように対処すべきか、ということにも理解を寄せる。それは、関わりたいが相手にされない「ご先祖さま」を放っておくこと、親しみや好感の持てない「ヘムレンさん」を排除しないこと、吹雪の中での歩き方の体得、といったことである。

次章では、こうした「理解」という観点から『ムーミン谷の仲間たち』を読み解きたい。

第二章　『ムーミン谷の仲間たち』における理解・不理解の主題

『ムーミン谷の冬』でムーミントロールが「ご先祖さま」や「ヘム

レンさん」との関係から、他者の性質を理解し、彼らにどのように対処すべきかを理解したが、これは他者理解かつ自己理解であると言えよう。『ムーミン谷の仲間たち』はそれぞれの物語には明確な関連のない短編集となっており、それぞれの作品で主に登場人物間の会話や関係性が描かれているが、これらの作品においても他者関係から生じる自己理解や他者理解を見つけ出す。

第一節　自己理解：「春のしらべ」

「春のしらべ」は、スナフキンと、彼が「春のしらべ」を構想しているところに現れた「はい虫」との物語である。この節では、はい虫の自己理解について述べる。それによって自らの生に意味を見出し、自己理解に達した。

はい虫はスナフキンに初めて会った際、「ぼくは、スナフキンさんのたき火にあたった、はじめてのはい虫なんです。ぼく、一生そのことを忘れませんよ。」と発言しており、スナフキンという他者を介して自己を評価していることがわかる。はい虫は、スナフキンに名づけを懇願し、「ティーティ＝ウー」という名前を与えられた。その後はい虫は、名前のない時の自己について、「ぼくはこれまで、そこらをとびまわるときに呼ばれる名まえをもっていただけ」であり、危険や無害を感知することはあったが、「すべては、ぼくのまわりでただおこっているだけ」で、どれも真実ではなかったとスナフキンに話した。そしてはい虫は、去る前にスナフキンに以下のように語った。

> 「ところがいまは、ぼく、一個の人格なんです。だから、できごとはすべて、なにかの意味をもつんです。だって、それはただおこるんじゃなくて、ぼく、ティーティ＝ウーにおこるんですからね。そして、ティーティ＝ウーであるぼくが、それについてあれこれ考えるわけですからね（後略）」[3]

このように、はい虫は、名前を得たことによって自己を主体的な存在として認識するようになったという意味で、自己理解を遂げている。

第二節　他者理解を経た自己理解①：「春のしらべ」

では次に、『ムーミン谷の仲間たち』において、登場人物の理解が他者に向けられる場合を考えたい。前述の「春のしらべ」では、はい虫は自分自身のために行動し、発言しているが、スナフキンははい虫について考えている。視点をスナフキンに置き直し、再び「春のしらべ」を考える。

まず、スナフキンの創作の態度を確認しておきたい。作品の冒頭で彼は、「いく日も、あたためてきた」歌を作り始めようとしているが、彼が創作を行う際には、他者を忘れる必要があるようだ。それは、以下に引用する、スナフキンが友人のムーミントロールについて考えている箇所からわかる。

> それができあがったら、ムーミン谷についたときに、あの橋の手すりにこしかけて、うたってみましょう。そしたら、きっとムーミントロールが、すぐさまいうことでしょう。
>
> 「いい歌だねえ、ほんとにいいうただねえ」って。
>
> そのとき、スナフキンはほんのすこし心配になって、足をとめました。
>
> そうです。ムーミントロールは、いつでもなにかをまって、あこがれています。ムーミントロールは家にいて、スナフキンのくるのをまちこがれ、スナフキンを崇拝しているのです。それでいて、いつでもいうのでした。
>
> 「もちろんきみは、自由でなくちゃね。きみがここをでていくのは、とうぜんですよ。きみがときどきひとりになりたいという

気持ちは、ぼく、よくわかるんだ」って。

そのくせ、そういいながらもムーミントロールの目は、かなしみでまっくらになり、だれがどうなぐさめてもだめなんです。

「ああ、あいつはいいやつだなあ、あいつは！」

スナフキンはこうつぶやいて、また未知をつづけました。

「うん、あいつはいいやつだ。あのムーミントロールってやつは、まったくおセンチだからなあ。だけど、いまはあいつのことは考えまい。あいつはほんとにすばらしいムーミンだけれど、いまはあいつのことを考えてはいけないんだ。今夜は、ぼくのあたらしい歌のことだけを考えること。あしたはまたあしたの風がふくさ」

まもなくスナフキンはムーミントロールのことは、すっかり忘れることができました[4]。

スナフキンは、完成した曲を友人のムーミントロールに聞かせることを考えたり、彼の性格を案じたりしているが、そのすぐ後に意図的に彼を思考の外に追い出した。スナフキンがこの夜にキャンプをしているところへはい虫が現れるのだが、会話をしていると、「ひとりだけでなくなったので、すべてがかわってしま」い、スナフキンの歌は「だめ」になった。創作ができなくなったことと反比例するように、スナフキンのはい虫への関心は大きくなっている。創作に意識の向いていたスナフキンは「そっけなく」、「むっとし」ていたが、「どうせ今夜はだめになったのだから、気楽に話をしようと思」うようになり、名前を与えたはい虫が立ち去ると、「もどっておいでよ」と呼びかけた。この翌日、スナフキンは春のしらべの「ほんのとっかかりさえもが、頭にうか」ばなくなり、「はい虫のことしか考えられ」ず、はい虫に再会するために引き返しており、はい虫への態度が好意的なものへと変化していることがわかる。スナフキンは創作の意識が強い時には他者（ムーミントロール）を意識の外に排除でき、他者（はい虫）への

意識が優越すると他者のことが思考を支配し、創作ができなくなっている。このように、彼にとって創作と他者関係とは両立しがたいものであるようだ。

では、スナフキンの他者への意識と理解とは、どのように関わっているだろうか。彼は、はい虫に対して二度理解を示している。スナフキンは、名付けたはい虫が急に去った直後に「いつもあいそうがいいというわけにはいくまい。そういうことは不可能だ」と、はい虫の行動に理解を示している。また、はい虫に再会した彼は、はい虫から名前を得たことによって生じた心的な変化について聞き、再び別れると、「ふうん。よし、わかった」と言い、はい虫が彼自身のために一人で行動することを望んでいるのだと理解している。スナフキンがはい虫への理解を深め、ひとつの他者関係を終えたことによって、彼は再び孤独を取り戻し、歌の創作に戻ることを可能となった。作品の最後にスナフキンが構成している春のしらべには、「たったひとりでいることの、大きな大きなよろこび」が含まれるが、他者関係によって創作に必要な孤独を再認識したこの過程は、「他者理解を経た自己理解」であると言えるだろう。

第三節　他者理解を経た自己理解②：「世界でいちばんさいごの竜」

「世界でいちばんさいごの竜」でムーミントロールが「竜」を理解することも「他者理解を経た自己理解」と言える。作中には、ムーミントロールとスナフキンとの関係、という視点もあるが、ここでは、ムーミントロールが竜に対してどのような心的変化を遂げたか、という視点で分析を行う。

この作品は、ムーミントロールが虫捕りの最中に捕まえた小さな竜に関する物語である。ムーミントロールは捕まえた竜を気に入り、「ペットにする」ために持ち帰った。竜は煙を吐いて火傷を負わせたり、かみついたりするなど、ムーミントロールやその家族に攻撃的な態度

を取ったが、スナフキンに対しては、肩に止まったり、傍に座ったりした。ムーミントロールは、竜はスナフキンに好意を寄せていると認識し、スナフキンが去ったことに悲しむ竜の姿を見ると、竜を外へ逃がした。彼は、竜はスナフキンのもとへ向かうと推測し、実際そうであったが、彼が夕暮れ時にスナフキンのいる川辺へ行く前に、スナフキンは通りかかった「ヘムル」に頼み、竜を遠くへ運ばせていた。ムーミントロールは竜の所在をスナフキンに尋ねたが、スナフキンは、自分のところに竜は来ていないと言った、というのがムーミントロールと竜との関係を中心に捉えた筋書きである。以下の引用は、これに続くムーミントロールがとスナフキンの会話だが、ここにムーミントロールの竜に対する理解が現れている。

> 「小さい竜なんてものは、気まぐれだからねえ。きみも見たとおり、あちこちをとびまわって、もしふとったはえでも見つけようものなら、ほかのことはすべてわすれちまうんだ。りゅうなんて、そんなものさ。とてもつかまえておけるもんじゃないね」
>
> ムーミントロールは、ずいぶん長いこと、おしだまっていました。それから草の上にすわると、こういいました。
>
> 「たぶん、きみのいうとおりかもしれない。にげてしまって、それでいいんだろうね。うん、そうだ。ぼく、そう思うよ、スナフキン。（後略）」[5]

この作品におけるムーミントロールの竜に対する心情の変化をまとめると、彼は言葉を話さない竜の態度に接し、竜がスナフキンにのみ好意を寄せていることを理解したことによって、竜を飼うことをあきらめ、手放すことを決断した。こうしたことから、彼は他者理解の結果として、自己が他者に対してどうふるまうべきかを理解することに到達している、と読み取ることができる。「にげてしまって、それで

いいんだろうね」という発言により、ムーミントロールは自分が好意を寄せている相手から距離を置かねばならない場合があることを認めているとわかる。

「春のしらべ」におけるスナフキンは、創作において自分にとって孤独が重要であることを再認識し、自己が自己のためにどうするべきか理解したが、「世界でいちばんさいごの竜」におけるムーミントロールは、関わることのできない他者の存在を認め、自己が他者のためにどうするべきかを理解した。このように、これらふたつの理解は性質の異なるものであるが、自己理解に際して他者理解を経由している点において共通している。

他者理解を経由した自己理解は、他者理解そのものが到達点ではなく、自己が主体となる理解に到達しており、自己理解の意味合いが大きいものと言える。『ムーミン谷の仲間たち』では、他者を理解すること自体は目的となっておらず、他者理解は作品あるいは場面の主体である自己に還元されるものとして扱われている。

第三章　『ムーミン谷の仲間たち』における「不理解」の主題

『ムーミン谷の仲間たち』の作品の中には、他者との関わりを経ても心理的な変化がない作品の中心となる登場人物もいる。これは、前作『ムーミン谷の冬』との違いである。

第一節　他者および自己不理解：「スニフとセドリックのこと」

「スニフとセドリックのこと」では、スニフの他者および自己に対する不理解を見出すことができる。自己この作品は、スナフキンの物語をスニフが聞く様子が中心となっている。スニフは、「セドリック」というフラシ天の犬を大切にしていた。作品冒頭では、セドリックとスニフについて、以下のように簡潔に説明してある。

セドリックは生きてはいません。ものなんです——だけどまあ、なんというものだったでしょう。ひと目見たところでは、かれはほんの小さなフラシ天（ビロードの一種）のいぬで、おまけにあんまりかわいがられすぎて、毛がはげていました。しかし、よく見ると、その目はほとんどトパーズ（黄玉）みたいでしたし、首輪のとめ金のそばには、ほんものの小さい月長石をはめていましたっけ。

おまけにその顔には、だれにもまねできない表情がありました——どんないぬだって、こんな表情はできませんよね。ひょっとすると、スニフにとっては、そんな表情よりも宝石のほうが、たいせつだったかもしれません。でも、とにかくスニフはセドリックをかわいがっていたのです[6]。

スニフは、友人のムーミントロールから、「もし自分がほんとうにすきなものを人にやったら、それが十倍になってかえってくる。だから、あとで、すばらしい思いをする」という話を聞き、セドリックを手放したが、何事も起こらなかったため、後悔し、それゆえに寝付けずスナフキンのもとへ行った。そこでスニフは、スナフキンから「ぜんぶの持ちものを一つのおもしろい話にした」彼の「ママのおばさん」の話を聞いた。スナフキンによれば、そのおばさんはある時、「骨付きカツレツの骨」がのどに詰まって取り出せなくなった。手の施しようがなく、医者に死を宣告されると、彼女は持ち物を残して死ぬことを考えて悲しくなり、家の中に多くの物があることを息苦しく感じるようになった。しかしその後、それぞれの物を誰が持つことがふさわしいか考え、それらを匿名で親類に送ることを楽しむようになった。彼女は、家から物が減った頃、友人を招いて笑い合っていた時にのどから骨が取れ、一命をとりとめた。その後、最後の持ち物であった天蓋付きのベッドを売り、過去に抱いた夢であった大パーティ、孤児院

の建設、アマゾン川への訪問を実現させた。

さて、では、スニフとスナフキンの会話の流れを追いながら、不理解の主題を掘り下げたい。

まず、スニフとスナフキンの会話の前半を見てみよう。スナフキンの物語るおばさんが「うつくしいものたちを愛して、一生それらのものをあつめ」、「それをよりわけ、みがきたてて」いたことを聞くと、スニフは、「しあわせな人だなあ。それで、その女の人は、どういうものをあつめたの」と、その収集物に関心を寄せた。また、おばさんが死を宣告され、おばさんは「天国へいったら、なにか新しいコレクションをはじめようと、こう思ってみても、どういうわけだか、ちっともたのしくならなかった」と聞くと、「かわいそうに！じゃあ、その人は、ほんの小ちゃなものでも、もっていくわけにはいかないの」と、「なき声を出し」ており、物を手放すことは悲しいことであると考えている。さらに、おばさんが「もってるものをぜんぶ、ひとにやっちまう」ことを考えついたことに対してスニフは「ばかばかしい」と評している。ここまでの会話からは、スニフが所有することに執着していることがわかる。

スニフはこれ以降、物を手放し始めてからのおばさんの行動に対して否定的な反応を示すようになった。おばさんが親類や知り合いに持ちものを小包で送ったことに対して、「だけど、ぼくはセドリックを、小包でなんか送らなかったよ。それにぼくは、まだ死ぬってわけじゃないんだ！」と叫び、おばさんへの共感を拒否している。家にある物が減るにしたがって「おばさんの気持ちがあかるくな」り、「いつでもすぐとんでいける幸福な風船」のように感じたとスナフキンが話すと、スニフは、「天国へだろ」と「ぶっきらぼうに」話を遮り、話の結末はものをすべて譲ったおばさんが「天国へいって、とてもしあわせになった」というものであると早合点した。そしてスニフは、彼自身も「セドリックだけでなく、もっているものをぜんぶやってしまう

がいい」というのがスナフキンの物語の意図であると、スナフキンの話から教訓を予測し、それを否定した。おばさんの病気が治ったことをスナフキンは説明すると、スニフはおばさんが「かわいそう」であると言ったが、その理由は、やはり所有へ執着しているからである。それはスニフが、「だって、おばさんはなにもかも、人にやっちゃったんだろ。そうじゃないか、まるっきりむだにさ！だって、それならあの人はけっきょく死ななかったんだろ。それで、品物はとりかえしたの？」と言っていることからわかる。

スニフがおばさんの価値観への共感を拒否し自己の問題へ話を差し替えたことにより、他者不理解への道は閉ざされている。また、彼が自分とは異なるおばさんの価値観を聞いた後に彼自身の価値観を顧みることがなかったという意味では、自己不理解であるとも言える。こうしたスニフの態度は、『ムーミン谷の冬』において相対化により物事を理解したムーミントロールとは対照的である。

第二節　自己不理解：「春のしらべ」

前章で言及した「春のしらべ」におけるスナフキンについても、不理解を指摘できる。スナフキンは、先述のように他者理解を経て自己理解に達するが、この自己理解は、創作する自己に対する理解である。彼は、冒頭でムーミントロールを意図的に思考から排除するが、それは創作のためであり、いかなる場合でも他者関係を拒否しているということではないようである。スナフキンの不理解を考えるにあたり、名付けた直後にはい虫が去った翌朝のスナフキンの様子を引用する。

> あくる朝、スナフキンは、また歩き出しました。つかれていましたし、きげんもわるかったので、かれは右も左も見ないで、どんどん大またに北をめざしていきました。あの春のしらべは、ほんのとっかかりさえもが、頭にうかびませんでした。

ただもうスナフキンは、あのはい虫のことしか考えられなかったのです。あのはい虫がいった一つ一つのことば、自分がいった一つ一つのことばまで、かれはよく思いだすことができました。それで、それをくりかえしくりかえしかみしめていたため、とうとう気分がわるくなって、こしをおろしてやすまなくてはなりませんでした。

「ぼくはいったいどうしたんだ。こんな気分になったことは、いちどもないぞ。きっと、病気になったのにちがいない」

こう、スナフキンは思いました——はらだたしい思いと、困ったような気持ちで。

それからまた歩きだしましたが、やはりおなじことでした。あの虫のいったことと、自分の答えた言葉が、のこらず、さいしょから思いだされてくるだけでした。

とうとうかれは、たちどまりました。午後になると、くるりとむきをかえて、ぎゃくもどりをしはじめました。

しばらくいくと、だんだん気分がよくなってきました。スナフキンは、いよいよ足をはやめました。しまいには、ふうふうあわをふいてはしりました。

かれの耳のあたりを、小さいしらべたちがとびちがいましたが、つかまえるひまがありません。夕方になって、あのしらかばの林にもどると、かれは大きな声でよびはじめました。

「ティーティ＝ウー、ティーティ＝ウー」[7]

その後、スナフキンは、日が暮れるまではい虫を探した。彼は新月に願掛けをする時、いつもは歌ができることや道に迷った際に正しい道が見つかることを願うが、この時は「どうか、ティーティ＝ウーが見つかりますように」と願った。この後は、先に言及した内容と重複するが、はい虫に再会し、「おしゃべりをしたくてもどってきたよ」

と声をかけた。そして、はい虫から名前を得たことが主体性を持つことにつながったことを聞く、というところにつながる。

はい虫と一度目に別れてから再会するまでの様子を見ると、スナフキンははい虫と関わることを必要としているが、それは意識化されておらず、感情や体調に表出しており、「他者との関係を欲する自己」を理解していないと読み取ることが可能である。このように、スナフキンは一方では自己理解に達しているが、他方では自己に対して不理解の部分もある。

終章　安全と災難以後のヤンソン作品

『ムーミン谷の仲間たち』では、第二章で論じてきた作品以外の全ての作品においても、理解および不理解の主題を見つけることができるが、ここでは作品名を挙げるにとどめる。「この世のおわりにおびえるフィリフヨンカ」、「目に見えない子」「ニョロニョロのひみつ」では理解が、「ぞっとする話」、「しずかなのがすきなヘムレンさん」、「もみの木」では不理解が、様々な登場人物たちの関係によって、多様に現れている。

『ムーミン谷の冬』までのムーミンシリーズは、安全と災難の構造によって共通点および変化を指摘することができる。そして、『ムーミン谷の冬』ではこの構造に替わって理解の主題が扱われはじめ、『ムーミン谷の仲間たち』ではこの主題は個人が抱える理解・不理解として拡張的に引き継がれていることによって変化を示している。「この世でいちばんさいごの竜」におけるムーミントロールの理解は、『ムーミン谷の冬』で彼がご先祖さまやヘムレンさんに対して寄せた理解と類似している。ムーミントロールは、第8作目『ムーミンパパ海へいく』においても、好意の対象である「うみうま」と関わりを持てないことを理解しており、「他者との関係性の理解」は、継続して扱われている主題である。理解の主題は、第9作目『ムーミン谷の

十一月』にも引き継がれる。この作品では、登場人物たちが共同生活を行うなかで様々に関わり、会話を重ね、「ヘムレンさん」、「フィリフヨンカ」、「ホムサ・トフト」が、自らの在り方を見出し、自己理解を遂げる。

また、不理解は、第5作目『ムーミン谷の夏まつり』でも扱われているが、作品の設定としてのものである。ここでの主題は、登場人物たちが「洪水に流されて、いろんなおそろしいめにあったすえ、やっとじぶんの家を、もう一度、見つける」過程の筋を追うことにあり、彼らが芝居を理解しないことは、作品の設定という意味合いが大きい。『ムーミン谷の仲間たち』は筋書きではなく心理描写が中心であり、不理解は個人の抱える問題である。

第9作目『ムーミン谷の十一月』での、不理解は、登場人物たちが他者や自己を理解しない様子に現れている。

いずれにしても、ムーミンシリーズにおける不理解は、登場人物には理解の必要がないものとなっている。すなわち、理解に到達しないことが問題にはならず、不理解のままでも物事が良い展開になる、ということである。「スニフとセドリックのこと」においてスニフは自己へも他者へも不理解であったが、最後には手元に戻ったセドリックを大切にし続けた人物として、名誉を高めている。

ムーミンシリーズ以降、ヤンソンは多くの短編を執筆しているが、ここでも理解あるいは不理解の主題を扱うものがあり、その中では、不理解を扱う作品が多い。ムーミンシリーズにおける不理解と、大人向けの作品における不理解とは、さらに性質が変化している。ヤンソンの大人向け作品では、登場人物が自己や他者を理解できないことが、人物間の不和を招くことになる。

〔注〕

1　トーヴェ・ヤンソン（冨原眞弓訳）、「国際アンデルセン賞受賞スピーチ」、『ムー

ミン画集』、講談社、2009、pp. 106-108。

2　ヤンソン（山室静訳）、『新装版 ムーミン谷の冬』、講談社、2011、pp. 183-184。

3　ヤンソン（山室静訳）、『新装版 ムーミン谷の仲間たち』、講談社、2011、p. 26。

4　同上、pp. 7-9。

5　同上、pp. 120-121。

6　同上、pp. 230。

7　同上、pp. 22-23。

使用テクスト

ヤンソン（冨原眞弓訳）、『小さなトロールと大きな洪水』、講談社、2011。

ヤンソン（下村隆一訳）、『新装版 ムーミン谷の彗星』、講談社、2011。

ヤンソン（山室静訳）、『新装版 楽しいムーミン一家』 講談社、2011。

ヤンソン（小野寺百合子訳）、『新装版 ムーミンパパの思い出』、講談社、2011。

ヤンソン（下村隆一訳）、『新装版 ムーミン谷の夏まつり』、講談社、2011。

ヤンソン（山室静訳）、『新装版 ムーミン谷の冬』、講談社、2011。

ヤンソン（山室静訳）、『新装版ムーミン谷の仲間たち』、講談社、2011。

ヤンソン（小野寺百合子訳）、『新装版 ムーミンパパ海へいく』、講談社、2011。

ヤンソン（鈴木徹郎訳）、『新装版 ムーミン谷の十一月』、講談社、2011。

Jansson, Tove, *Det osynliga barnet och andra berättelser*, Schildts, 1962.

参考文献

芦田みゆき、「≪ムーミン谷≫」、青土社、『ユリイカ』、第 30 巻第 5 号、1998、pp. 132-150。

川口喬一、岡本靖正編、『最新文学批評用語辞典』、研究社出版、1998。

北川美由季、「スナフキンのモデルについての考察（1）－「ムーミン」論に現れた先行研究諸例の検討－」、バルト＝スカンディナヴィア研究会、『北欧史研究』第 27 巻、2010、pp. 16-27。

ジェラルド・プリンス（遠藤健一訳）、『物語論辞典』、松柏社、2015

谷本誠剛、『児童文学とは何か : 物語の成立と展開』、中教出版、1990。

トーベ・ヤンソン（安達まみ訳）、「私の本とキャラクターたち」、青土社、『ユリイカ』、第 30 巻第 5 号、1998、pp. 80-87。

トーヴェ・ヤンソン（冨原眞弓訳）、「国際アンデルセン賞受賞スピーチ」、『ムーミン画集』、講談社、2009、pp. 106-109。

（英語版：Jansson, Tove. "Acceptance Speech of WINNER OF THE HANS CHRISTIAN ANDERSEN AWARD 1966." *Bookbird* 4（1966）: 3-6. Austrian Literature Online. Web. 30 Oct. 2014.）

トゥーラ・カルヤライネン（セルボ貴子、五十嵐淳訳）、『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』、河出書房新社、2014。

冨原眞弓、『ムーミンを読む』、講談社、2004。

冨原眞弓、『ムーミンのふたつの顔』、筑摩書房、2005。

冨原眞弓、『トーヴェ・ヤンソンとガルムの世界－ムーミントロールの誕生－』、青土社、2009。

冨原 眞弓『ムーミンを生んだ芸術家 トーヴェ・ヤンソン』、新潮社、2014。

Jones, W. Glyn. *Tove Jansson*. Boston: Twayne Publishers, 1984.